

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

読字障害を持つ児童への支援について
—タブレットの読み上げ機能を用いたテストを通して—

板垣 静香, 青戸 正裕

本研究は、読字障害を持つ小学4年生の男子児童が、読み上げ機能のあるタブレットを使用してテストを受けることにより、テスト結果、およびテストに対する意欲がどのように変化するのかを検証したものである。国語の読解テストを、タブレットの読み上げ機能を用いて被験者に対し実施したところ、テスト結果は、1回目100点、2回目85点、3回目75点、4回目70点であり、自力で受けたテストでは、0点～10点前後だったことから、飛躍的にテストの点数が上がったことが分かる。また、テストの点数が向上したことにより、被験者の学習に対する意欲が以前よりも増した様子が伺えた。本研究の被験者のように、読みに困難を抱える児童が、タブレットによる読み上げの支援を受けることにより、学習に対する自信を深め、自尊心の向上につながることを、今後期待できる。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

勧誘の場面で用いられる否定疑問文はなぜポライトな表現になるのか

許 夏玲

日本語の否定疑問文が勧誘の場面でよく用いられ、たとえば「コーヒーでも飲みに行きませんか」は丁寧な表現とされ、聞き手が誘いに応じてくれるかどうかを話し手が不安に思うため、聞き手が断りやすいように否定形を用いると説明される。本稿では中国語と英語の表現を参考にしながら、語用論の観点から勧誘や依頼の場面で用いられる否定疑問文の真相を突き止め、異文化での言語行動の接点を求めることを試みる。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

重複の少ない話者交替を実現するラジオトークの言語使用に関する分析

清藤 弥生, 寺岡 丈博, 榎本 美香

本研究の目的は、言葉によるやりとりだけで情報をリスナーに伝えるラジオトーク独特の言語使用のあり方を明らかにする。話者交替という現象に着目し、ラジオ出演者らの円滑な話者交替が言語的にどのように実現されているのかを明らかにする。男性3人のラジオ番組の収録場面(約40分×4回)を分析対象とする。話者交替に要する時間を調べたところ、発話の重複が極めて少ないことが分かった。そこで、発話の形態素解析を行ったところ、特に重複された発話において「助動詞」の使用が顕著であった。これは、ラジオトークでは発話末尾を明示するために助動詞が多用され、そのような時にのみ重複が生じていることを表している。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

ある品詞として具現化された心的表象に対応するジェスチャーの時間的構造の分析

金子 慶也, 寺岡 丈博, 榎本 美香

本研究では、会話中の発話と同時に表出されたジェスチャーに着目し、名詞や動詞といった形態素に対して、ジェスチャーがどのような形態・時間的推移で生成されているのかを明らかにする。分析1では同じ心的表象を表出する発話とジェスチャーが産出される時間的タイミングを分析し、発話がジェスチャーより若干先行することを示す。分析2では名詞や動詞といった異なる形態素として表出された表象のジェスチャーの生成タイミングは分析1とほぼ同様であるが、名詞に伴うジェスチャーの形態は、特定の形を持つもので完成形の部分が一点であるのに対して、動詞に伴うジェスチャーの形態は一定の時間的長さの動きであり完成形の部分も一定の時間幅をもつことを示す。これらの分析から、名詞や動詞といった異なる形態素として表出された表象のジェスチャーは異なる時間的構造をもつことを提唱する。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

話題の展開に寄与する聞き手の役割
—日・英語初対面会話の対照分析—

大谷 麻美, 岩田 祐子, 重光 由加

本研究は会話における聞き手の行動と、その結果、生じる話題展開や自己開示の特徴について、日・英語間で比較対照を行ったものである。具体的には、**1. 聞き手の行動と話題の展開スタイルの特徴** **2. 聞き手の行動がもたらす話題の展開や自己開示の大きさの二点を分析することで、両言語の会話特徴を明らかにした。** さらに、その聞き手行動の中で特に頻繁にみられる質問を取り上げ **3. 両言語の質問の仕方について比較を行った。**

その結果、両言語共に、聞き手が話題の展開や自己開示の深化に大きく寄与しているものの、一方でその関与の仕方には相違点も見られた。また、この聞き手行動の相違が、両言語の話題展開のスタイルや自己開示の深さにも影響を与えていた。そして、これらの聞き手の行動の差異の背後には、両言語での初対面の場で期待される人間関係の築き方に対する考え方の相違が反映されているものと考えられる。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

震災報道の在り方を捉え直す
—<被災した人>と<そうでない人>の断絶から—

堀口 典子

東日本大震災は、《わたしたち》の中に大きな“断絶”を生み出した。震災によって<被災した人>と<そうでない人>の存在である。当時、筆者は放送局に勤務していた経験から「メディアは、この“断絶”をどう捉えているのか」を研究することに思い至った。

震災報道の研究は、すでに行われているが、いずれも新聞報道、政府の会見など、情報が一方向に送られているものに留まっている。

本研究では、震災報道をテレビ番組のゲストとキャスターのインターアクションを批判的談話分析によって、<被災した人>と<そうでない人>がどのように表出されているのかを明らかにする。

一例を挙げると、キャスターがゲストに質問する場面では、<そうでない人>のキャスターと、<被災した人>の代弁者としてのゲストが、それぞれの思いをぶつけ合う様子が見られた。

この“断絶”について、多くの方々からご意見をいただき、さらに考察を深める機会にしたい。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

テレビニュースにおける人間・経済・社会の表象
—「TPP大筋合意」の報道のクリティカル・ディスコース分析—

糟屋 美千子

本研究は、2015年10月に大筋合意したTPP(環太平洋連携協定)についてのテレビ報道を、クリティカル・ディスコース分析の手法で言語的・非言語的要素の分析を行なうことで、テレビ報道により、どのような考え方がどのように作られたかを明らかにすることを目的としている。TPP大筋合意を伝えたテレビニュースを微細に分析し、この出来事をめぐる社会・経済の仕組みや、その仕組みの中に存在する人間をどのように表象したかを検討した。

分析の結果、報道のディスコースが様々な要素を組み合わせることで、TPP大筋合意への賛否様々な反応・解釈を取り上げながらも、ある側面を強調したり、逆に排除したり、分類・評価することで、特定の解釈を選び、それに沿う形で話を展開していったことがわかった。そして、特定の間人像、社会や経済の仕組みを表象し、それが唯一可能な解釈であるという考え方を作っていることが明らかになった。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

再勧誘後における断り発話の出現について
—日本人女子学生とインドネシア人女子学生の比較—

吉田 好美

本研究では、断り発話が出現してから再勧誘があった場合、その後に再度断りが出現するか否かに着目し、日本人女子学生(JNS)とインドネシア人女子学生(INS)のコミュニケーションスタイルの特徴を明らかにすることを目的とした。

分析の結果、JNSのほとんどの会話データで再勧誘が起こらず、初出の断りのみで会話が収束していたが、INSの多くは、再勧誘及びその後の断りが出現していた。また、再勧誘後の断りの出現において、JNSは、再勧誘後の1回、つまり、第2の断りの出現までに留まったが、INSは、再勧誘を複数回繰り返し、第3、第4、第5の断りまで出現することが分かった。

以上のことから、コミュニケーションスタイルにおいて、JNSは、断りを表出したら、それを察して再勧誘をしないのに対し、INSは、断りを表出しても再勧誘を受け、やりとりを繰り返しながら調整していくというスタイルであることが示唆された。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

とりたて詞「も」の語用論的考察
—文脈との関わりから—

稲吉 真子

日本語の「も」の用法は、「累加」、「極限」、「ぼかし」に分類するのが一般的な分類である。この内「ぼかし」については雑多な部分が多く、用法として十分な説明がなされていない。従来の研究では下位分類によりそれらを明確化しようとする方法が主流であったが、本研究では、文脈との関わりから「も」の用法について考察する。文脈の定義に関しては加藤(2009)に従い、①形式文脈、②状況文脈、③知識文脈を用いる。例えば「時間も遅いし、今日は帰ろう。」という場合、「警備員が施錠をし始めた音がする」などの外的な関連性は「状況文脈」に当たり、「帰りの電車がなくなってしまう」などの共有知識は「知識文脈」として分類できる。話し手はこのような文脈と、「時間が遅いこと」に類似性を見だし、「も」を使用していると考えられる。このような用例を主にテレビドラマや小説などの会話文から収集し、発話時の状況を含め、包括的に考察する。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

社説記事における日本の少子化原因の表象
—批判的ディスコース分析 (Critical Discourse Analysis) の観点から—

稲永 知世

本研究は、批判的ディスコース分析 (CDA) の観点に基づいて、平成2年から平成25年までの『朝日新聞』、『毎日新聞』及び『読売新聞』において発表された、少子化現象に関する社説記事を分析する。とりわけ、少子化に関わる社会的行為者、及び彼らによる社会的行為の表象における言語的特徴に注目して、ディスコース群を特定することにより、日本の新聞社の社説記事において、少子化現象が、誰の、どのような「問題」として表象されているかを言語的側面から明らかにすることを目的とする。結果として、社会的行為者としての女性の包含、男性の背景化、行政機関や政府の排除、女性の社会的行為の動作主化や行政機関や政府の社会的行為の非動作主化といった表象により、行政機関や政府の責任を追求することを回避していた。また、少子化現象が、親、特に女性個人の「問題」という議論に寄与していると考えられる。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

撮影データの分別・分類に着目した景観文字調査ツール

田島 孝治, 佐村 拓哉, 堤 智昭, 高田 智和

この発表では、スマートフォン向けの景観文字調査ツールの開発とテスト結果について述べる。今回開発したツールはスマートフォン上で動作するソフトウェアで、(1) 撮影インターフェースの工夫による同一対象ごとの写真分別、(2) 撮影時の位置情報の記録と修正、(3) 文字の種類や言語などの情報を付加、という機能を持つ。また、撮影した情報をサーバに集約することで、研究者間の情報共有を行えるだけでなく、付加したデータに基づき地図上で分布を確認したり、統計処理を行うこともできる。今回はこの試作したツールを岐阜県大垣市および神奈川県鎌倉市でテストしたので、結果も報告する。開発したツールとサーバソフトウェアはオープンソースソフトウェアとしてWeb上に公開する予定である。また、動作確認の結果、同一地域での再調査を行いやすくする機能があれば、経年変化の記録に有効であることがわかったため、今後もさらに改良していく予定である。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

介護福祉士国家試験の筆記試験で使用された文法・語彙項目の特徴の分析

大場 美和子

本研究の目的は、EPA介護福祉士候補者の効率的な日本語学習をめざし、介護福祉士国家試験の筆記試験で使用された文法・語彙項目の特徴を、旧日本語能力試験の観点から分析することである。分析対象は、6回分の筆記試験(22 - 27回, 2009 - 2014年度, 全120問5肢選択形式)である。文法項目は旧試験の出題基準に従って各形式の総出現数を集計した。語彙項目(動詞・名詞)は形態素解析により品詞別に集計した。

文法項目の分析では、1級は1項目、2級は46項目のみの出現で、3級も特定の項目に出現が集中していた。語彙項目の分析では、延べ・異なり語数ともに動詞より名詞の出現が圧倒的に多く、名詞は級外語彙が40%を超え、介護の専門語彙が多くを占めた。日本語教育では、文法は頻出する項目に絞って導入し、語彙は介護の場面の状況を設定して専門語彙を効率的に導入する方法を検討する必要があると考える。

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

Twitterの言語資料的性格
—発信者と受信者の関係性の観点から—

岡田 祥平, 西川 由樹

近年, Twitterを言語資料として利用する日本語研究が散見されるようになった. しかし, そもそも, Twitterはどのような言語資料的性格を有しているのだろうか.

以上のような問題意識のもと, 約35,000のTwitterのデータを発信者と受信者の関係性の観点から分類, 考察した結果, Twitterは, 大きくは以下の五つの異なる性格を持つ言語資料の集合体と見なすべきという結論を得た.

- ・1ツイート: 不特定多数に向けた投稿
- ・2リプライ: 特定のユーザーに向けた投稿
- ・3リツイート: 他者の投稿を引用し再発信した投稿
- ・4シェア: 新聞記事や他サイトへのリンクなどの特定サイトへのリンクをアプリやホームページの機能による投稿
- ・5BOT: あらかじめ登録した文章を定期的に投稿するように設定したプログラムによる投稿

Twitterを言語資料として利用した日本語研究を行う際には, 各項の特性に留意する必要がある.

<<ポスター発表>> (3月20日 10:30-11:45)

【3階廊下】

日本語の終助詞「ね」に関する韓日対照研究
—韓国語の文末形式と終助詞「ね」の機能の対応関係を中心に—

朴 美貞

本発表では韓国制作のドラマ『미남이시네요(美男ですね)』のシナリオを使い、韓国語を日本語に訳した場合にみられる韓国語の文末形式と日本語の終助詞「ね」の対応関係を分析することである。分析対象は『미남이시네요』のシナリオ1話~8話中「ね」に訳されている211文である。形式の分析では、「ね」に訳されている韓国語の文末形式は12種類であり、「ね」と対応関係にある韓国語の文末形式は特定できない。機能の分析では韓国語の文末形式の5割近くは「ね」の一部の機能に訳されていることが観察されており、「ね」の各機能に対応している韓国語の文末形式はどれも3種類以上であった。つまり、機能の分析でも「ね」に特定できる韓国語の文末形式はみられない。その要因として韓国語の文末形式は、訳された日本語の文末に「ね」が付加されるため、「ね」に特定できる韓国語の文末形式が見られないと考えられる。